

Title	死別における死の形態の役割
Author(s)	大和田, 攝子
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 2000, 5, p. 3-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11723
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

死別における死の形態の役割

大和田 攝子

はじめに

1995年に起こった阪神・淡路大震災に始まり、地下鉄サリン事件や少年による相次ぐ刺殺事件など、多くの遺族を生み出した災害や事件はここ数年間に限っても枚挙にいとまがない。さらに、交通事故などの日常的な人為災害も含めると、死が毎日のように新聞やテレビで報じられるという時代にわれわれは生きている。死の形態はまさに現代社会を反映していると言えるだろう。

欧米諸国では死別に関する数多くの実証的研究が行われており、遺族の適応を決定する要因についてはさまざまな報告があるが、死の形態が適応に果たす役割についての実証的研究は意外に乏しい。今後、わが国においても、このような災害や犯罪・事故の遺族についての研究は、遺族への支援やケアのあり方を考えるうえで有用であると考えられる。そこで本稿では、通常の死別とは性質の異なる“特殊な死別”についての内外の研究を概観する。

1. 予期悲嘆と予期しない悲嘆

◆予期悲嘆とは

「予期悲嘆 (anticipatory grief)」とは、Lindemann (1944) が名付けたもので、「喪失を予期したときに起こる悲嘆過程」と定義される。遺族が予め悲嘆の諸相を経験することで、死が現実化したとき悲嘆に伴う諸症状が軽減するという現象を指している。しかし、その一方で、悲嘆過程が長引くと憤りや罪悪感が生じやすく、かえって悲嘆が強まるというネガティブな側面も指摘されている。

予期悲嘆は通常の悲嘆 (conventional grief) と類似した経過を辿る (Futterman et al., 1972; Reed, 1974; Weisman, 1974; Bourke, 1984; Rando, 1988) が、①患者と家族の両者が経験する、②死という終末が常にあるため延期されることはない、③理論的には時間の経過とともに促進される、④通常の悲嘆に比べて否認に陥りやすい、⑤予期悲嘆は希望という段階を含む、などの点で通常の悲嘆とは異なるとされている (Aldrich, 1974)。また、Fulton & Gottesman (1980) は、通常の悲嘆は故人を対象としているのに対し、予期悲嘆は患者を対象としている点で通常の悲嘆とは異なると述べている。Gilliland & Fleming (1998) は、末期がん患者の配偶者に対して死別前と死別後の2度にわたる面接調査を行い、予期悲嘆と通常の悲嘆を比較している。その結果、予期悲嘆と通常の悲嘆はほとんどの症状において類似していたが、予期悲嘆の方が病的悲嘆反応や怒り、感情のコントロールを失う程度が通常の悲嘆に比べて高いことが報告されている。

◆予期悲嘆に関する実証的研究

予期悲嘆に関する研究が盛んに行われるようになったのは1950年代以降である。初期の研究では、悪性疾患に罹患した子どもの親の予期悲嘆や対処に関する研究 (Bozeman et al.,1955 ; Richmond & Waisman,1955 ; Natterson & Knudson,1960 ; Friedman et al.,1963 ; Chodoff et al.,1964 ; Binger et al.,1969) が中心的であったが、近年では末期疾患の成人患者の家族を対象に、予期悲嘆が死別後の適応に及ぼす影響について検討した実証的研究が多く見られるようになった (Clayton et al.,1973 ; Bornstein et al.,1973 ; Gerber et al.,1975 ; Ball,1977 ; Sanders,1980 ; Bowling & Cartwright,1982 ; Sanders,1982 ; Parkes & Weiss,1983 ; Doka,1984 ; Lundin,1984a,b ; Jacobs et al.,1986)。

予期悲嘆を経験することで、死別が現実化したときの悲しみやそれに伴う諸症状が果たして軽減されるのだろうか。Lundin (1984a) は、突然の予期しない死別を経験した遺族は、死別を予期していた遺族に比べて、死別の前後で精神疾患の罹病率が有意に高くなることを見出している。また、死別後8年経過した追跡調査でも、心の準備のなかった遺族は悲しみや罪悪感、感覚の麻痺などを訴えており、死別を予期していた遺族よりも強い悲嘆反応を示すことが報告されている (Lundin,1984b)。

その一方で、Clayton et al (1973) は、配偶者を亡くした高齢の遺族を対象とした研究で、予期悲嘆の長さは死別後の諸症状とは関連がないことを明らかにしている。さらに、Gerber et al (1975) は、高齢の遺族を対象とした研究で、配偶者を長期間の病臥の後に亡くした遺族の方が、短期間の病臥の後に亡くした遺族よりも予後が悪いことを示している。

このように、死別を予期していた方が死別後の適応がよいという研究 (Ball,1977 ; Parkes & Weiss,1983 ; Doka,1984 ; Lundin,1984a,b) もあれば、死別の予期とその後の適応とは関連がないという研究 (Clayton et al.,1973 ; Sanders,1980 ; Bowling&Cartwright,1982 ; Jacobs et al.,1986 ; Reif et al.,1995)、さらには予期悲嘆の期間の長さによって死別後の適応に及ぼす影響が異なるという研究 (Gerber et al.,1975 ; Sanders,1982 ; Rando,1983) もあり、一貫した結果は得られていない。

このような見解の不一致の原因として、死別までの期間の長さ、対象者の続柄や年齢など方法論上の違いや、定義の不明確さ、予期悲嘆以外の要因、適応の個人差 (Fulton et al.,1980 ; Siegel & Weinstein,1983 ; Sweeting et al.,1990) などが挙げられている。

2. 突然死遺族の心理に関する研究

◆突然死による遺族の心理

突然死とは予期せず起こる死であり、災害や病気など人間の力ではどうしようもない不可抗力的なものと、人為的要素が濃厚なものがある。後者はさらに、犯罪や交通事故、医療過誤など他害行為による死と、自殺など自傷行為による死に区別される (平山,1997)。

Parkes&Weiss (1983) は、突然死の遺族は死を予期していた遺族よりも激しい悲嘆反応を起こすが、これは単に予期悲嘆がないことに起因しているのではないとしたうえで、突然の死別は予期された死別よりも外傷的であり、両者の悲嘆からの回復はまったく異なる過程を辿ると述べている。

Worden (1991) は突然死の後にみられる悲嘆に関して、いくつか考慮すべき特有の性質があることに注目してきた。以下にその要点を簡潔に述べる。

- ① 突然の喪失に対して、遺族は現実感のない状態におそわれる。遺族はショックのために、感覚が麻痺したようになり、しばしば混乱する。
- ② 罪責感が激しいことが挙げられる。一般的に、罪責感はいかなる死別においても見られるが、突然死の場合、「もし……さえしていれば」といった表現で表される罪の意識は特に強烈である。
- ③ 遺族は起こったことに対して誰かを非難したい気持ちになるが、突然死の場合、この欲求はきわめて強い。非難の対象には家族や友人、援助者などが挙げられるが、不幸なことに、子どもがスケープゴートになることも珍しくはない。
- ④ 特に事故や殺人の場合は、医学や法律の関係者と関わり合いになることが多い。調査や裁判などの手続きは状況をより複雑にし、遺された人に多大なストレスと緊張をもたらす。その結果、悲嘆の過程を長引かせることになるが、逆に判決が下り決着がつくと、ある程度悲嘆の終結が可能になることもある。
- ⑤ 遺族は強い無力感を体験する。この無力感は激しい憤怒感や復讐心と結びついており、周りの人に対して怒りを爆発させたり、故人の死に関係した人を殺したいという欲求に駆られることもある。
- ⑥ 故人に対してやり残したことがあるといった「未完了の務め (unfinished business)」が挙げられる。故人との関係を予告もなく断ち切れ、遺族は故人に対して言っておきたかったことや、しておきたかったことを後々まで悔やむことになる。
- ⑦ 死の状況について理解したいという病的なまでの強い関心をもつ。もちろん死の原因だけでなく、誰にその責任があるのかについて追求する必要もあり、結局唯一の可能な標的として神を選ぶことも稀ではない。

さらに、これらの性質の他に突然死の遺族の心理を特徴づけるものとして「心的外傷後ストレス障害 (Post-traumatic Stress Disorder : PTSD)」が挙げられる。PTSDの概念は1995年1月17日に起こった阪神・淡路大震災を契機にして、わが国においても広く知れ渡り、専門家やマスコミの注目を集めることとなった。PTSDがアメリカ精神医学会による精神疾患の診断統計マニュアル (Diagnostic and statistical manual of mental disorders : DSM) に最初に記載されたのは1980年 (DSM-III) であり、その後若干の修正が加えられ、現在のDSM-IV (American Psychiatric Association, 1994) に引き継がれている。PTSDは次の3つの症状に分類される。

① 侵入 (再体験)

トラウマを受けたまさにその場面が突然脳裏に蘇ってきたり、繰り返し外傷場面の夢を見るなど、トラウマとなった出来事その人の意思に反して日常生活の中へ侵入してくる現象である。

② 回避

トラウマを思い出させるような場所や状況を回避しようとしたり、トラウマとなった経験の記憶そのものが想起できなくなるなど回避性の症状と、社会的な活動や人間関係からの引きこもり、情緒的な反応性の減退など麻痺の症状が挙げられる。

③覚醒の持続的充進

ストレス負荷により生体の生理的覚醒水準が過度に高く維持された結果、睡眠障害や注意集中困難、特定の刺激に対する過敏な反応など自律神経系の興奮症状が挙げられる。

◆突然死遺族の心理に関する実証的研究

ここまで、突然死遺族の一般的な悲嘆の特徴について述べてきた。しかし、先述したように、突然死には病気や事故、自殺などさまざまな原因が含まれる。同じ突然死であっても事故であるのか自然災害であるのかによって、遺族の心の状態やケアのあり方は大きく異なるだろう。したがって、突然死の一般的な悲嘆反応を踏まえたうえで、それぞれの死因に特有の性質や問題を考慮に入れる必要があると考えられる。ここでは、交通事故や犯罪など人為的災害の遺族に関してこれまでに行われてきた実証的研究をいくつか紹介し、これらの遺族の心理過程と死別後の適応を予測する要因について概観する。

Shanfield et al (1984) は、子どもを交通事故で失った親40名に対して質問紙調査を行い、交通事故が遺族にもたらす影響について検討している。その結果、子どもを亡くした親は悲しみが深く、精神医学上の問題を多く呈していた。さらに、母親、娘の死、一緒に住んでいた子どもの死、出生順位の早い子どもの死、車の単独運転による単独事故、子どもとアンビヴァレントな関係にあった親は、困難な死別反応の予測要因となることを明らかにしている。

Lundin (1987) は、ホテル火災の遺族11名に面接調査を行い、11人中10人が精神病的障害を発症し、8人が問題ある悲嘆反応を示していることを見出した。また、よく機能するソーシャルネットワークをもつことや遺体との対面が、回復に良い影響をもたらすと述べている。

Lehman et al (1987) は、交通事故で配偶者(39名)や子ども(41名)を亡くした遺族に面接調査を行い、交通事故が遺族にもたらす長期的影響について分析している。それによると、配偶者を失った遺族は統制群よりも、うつや他の精神医学的症状、社会的機能、心理的幸福感、将来への不安などにおいて問題を示しているのに対し、子どもを失った親は離婚率や引越しが多く見られた。さらに、多くの遺族が事故のことや、もしかすると事故を防げたかもしれないと何度も思い巡らしており、事故から4~7年経っても家族を失った悲しみから回復できないことが明らかにされている。

Sprang & McNeil (1998) は、飲酒運転による犯罪で家族を失った遺族171名を対象に質問紙調査を行い、遺族の適応に影響を及ぼす要因を検討している。その結果、ソーシャル・サポートと宗教的信念は悲嘆反応やPTSDを軽減する効果があるが、時間の経過は悲嘆反応とPTSDのいずれにも影響を及ぼさないこと、また、女性の方がPTSDになる危険性が高いことなどを報告している。

わが国では、財団法人交通遺児育英会(1981; 1988; 1994)が、父親を交通事故で亡くした遺児とその母親を対象に全国調査を実施している。一連の調査結果をまとめると、以下のようなになるだろう。まず、交通事故で父親を失った家庭の多くは、経済的危機に直面し母親の就労を余儀なくされる。そして、ほとんどの母親が不眠や神経性の病気、対人関係の回避など何らかの心理的問題を体験していた。また、3割の遺児は、交通遺児であることを隠したいと思っており、母子家庭に対する社会的差別がうかがえた。

3. 死別の原因による比較研究

死の形態に関する研究では、予期悲嘆の有無による比較研究や個々の原因をテーマとして扱った研究の他に、それぞれの死別の原因により遺族の悲嘆反応を比較する研究も見られる。以下では、その中からいくつかの実証的研究を紹介しよう。

Shanfield et al (1984a ; 1984b ; 1987) は、成人した子どもを交通事故で亡くした親とがんで亡くした親の比較を通して、死別の原因による悲嘆反応の違いについて検討している。その結果、子どもを交通事故で亡くした親の方が、がんで亡くした親よりも悲しみが深く、健康上の問題や抑うつ、罪悪感などの精神医学上の症状を多く呈していることが明らかになった。一方、がんで子どもを亡くした親はその半数以上が人格的に成長し、また遺された家族に対して今まで以上に親密になったと報告している。

Range et al (1990) は、自殺 (9名)、犯罪 (8名)、事故 (17名)、予期していた自然死 (17名)、予期していない自然死 (17名) により家族や友人を失った大学生を対象に質問紙調査を行い、それぞれの死別がもたらす長期的影響を検討している。その結果、事故の遺族は他の遺族に比べて現実感がないと感じていたが、それ以外では死の原因による違いは見られなかったと報告している。

Miles et al (1992) は、自殺 (62名)、事故 (32名)、慢性疾患 (38名) で子どもを亡くした親を対象に自由記述による質問紙調査を行っている。分析の結果、子どもを亡くした親を最も苦しめるものとして、自殺で子どもを亡くした親の34%は罪悪感を挙げたが、自殺以外の親は孤独感を挙げたと報告している。

Cleiren et al (1994) は、自殺、交通事故、病気で家族 (配偶者、子ども、きょうだい、親) を亡くした遺族309名に対して、死別後4ヶ月後と14ヶ月後に構造化面接を行っている。その結果、死の形態よりも亡くなった人との続柄が遺族の心理・社会的機能に顕著な役割を果たしていた。さらに、死の形態にかかわらず、多くの遺族にPTSDの症状が見られたと報告している。

また、Cleiren et al (1996) は、配偶者を自殺や交通事故で亡くしたオランダ人とスロヴェニア人の遺族に対しても、死の形態による影響を調べている。その結果、周囲からの非難や疎外感については自殺者の遺族の特徴として多く見られたが、それ以外の心理・社会的問題については、死の形態による差異はほとんど認められていない。

Kelly et al (1996) は、家族や友人をエイズ (28名) あるいはがん (30名) で亡くした人を対象に半構造化面接を行い、それぞれの死別による心理・社会的影響を検討している。その結果、エイズの遺族については、ソーシャル・サポートの欠如、社会的スティグマ、死の原因についての自己開示の低さなどが特徴として見出されたが、死別後初期の調査時点では、精神的症状に違いは見られなかったと述べている。

以上、死別の原因による比較研究を概観してきたが、これらの研究を見る限りでは死の形態が果たす役割はほとんど見出されていない。しかし、これらの研究の多くは、遺族の代表的なサンプルを用いていないことや、故人の年齢や続柄が統制されていないなど、方法論上の問題が指摘されており、今後さらなる研究の蓄積が望まれる。

おわりに

日本における死別研究はまだ始まったばかりである。現代社会におけるさまざまな死の形は、わが国における死別研究が進むべき1つの方向性を提示しているといえるだろう。

引用文献

- Aldrich, C.K. 1974 Some dynamics of anticipatory grief. In Schoenberg, B., Carr, A.C., Peretz, D., & Kutscher, A.H. (Eds.), *Anticipatory grief*. New York: Columbia University Press.
- American Psychiatric Association 1994 Diagnostic and statistical manual of mental Disorders. 4th edition. Washington, D.C. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (訳) 1995 DSM-IV 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院
- Ball, J.F. 1977 Widow's grief: The impact of age and mode of death. *Omega*, 7, 307-333.
- Binger, C.M., Ablin, A.R., Feurstein, M.D., Kushner, J.H., Zoger, S., & Middelsen, C. 1969 Childhood leukemia: Emotional impact on patient and family. *New England Journal of Medicine*, 280, 414-418.
- Bornstein, P.E., Clayton, P.J., Halikas, J.A., Maurice, W., & Robbins, E. 1973 The depression of widowhood at 13 months. *British Journal of Psychiatry*, 122, 561-566.
- Bourke, M.P. 1984 The continuum of pre-and post bereavement grieving. *British Journal of Medical Psychology*, 57, 121-125.
- Bowling, A., & Cartwright, A. 1982 *Life after death: A study of the elderly widowed*. Tavistock.
- Bozeman, M.F., Orbach, C.E., & Sutherland, A.M. 1955 Psychological impact of cancer and its treatment: Adaptation of mothers to threatened loss of their children through leukemia, I. *Cancer*, 8, 1-9.
- Chodoff, P., Friedman, S.B., & Hamburg, D.A. 1964 Stress, defenses and coping behavior: Observations in parents of children with malignant disease. *American Journal of Psychiatry*, 120, 743-749.
- Clayton, P.J., Halikas, J.A., Maurice, W.L., & Robins, E. 1973 Anticipatory grief and widowhood. *British Journal of Psychiatry*, 122, 47-51.
- Cleiren, M.P.H.D., Diekstra, R.F.W., Kerkhof, A.J.F.M., & Van der Wal, J. 1994 Mode of death and kinship in bereavement: Focusing on "who" rather than "how". *Crisis*, 15(1), 22-36.
- Cleiren, M.P.H.D., Grad, O., Zavasnik, A., & Diekstra, R.F.W. 1996 Psychosocial impact of bereavement after suicide and fatal traffic accident: A comparative two-country study. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 94, 37-44.
- Doka, K.J. 1984 Expectation of death, participation in funeral arrangements, and grief adjustment. *Omega*, 15, 119-129.

- Friedman,S.B., Chodoff,P., Mason,J.W.,&Hamburg,D.A. 1963 Behavioral observations on parents anticipating the death of a child. *Pediatrics*, 32, 610-622.
- Fulton,R.,&Gottesman,D.J. 1980 Anticipatory grief:A psychosocial concept reconsidered. *British Journal of Psychiatry*, 137, 45-54.
- Futterman,E.H., Hoffman,I.,&Sabshin,M. 1972 Parental anticipatory mourning. In Schoenberg,B., Carr,A.C., Peretz,D.,&Kutscher,A.H.(Eds.), *Psychosocial aspects of terminal care*. New York:Columbia University Press.
- Gerber,I., Rusalem,R., Hannon,N., Battin,D.,&Arkin,A. 1975 Anticipatory grief and aged widows and widowers. *Journal of Gerontology*, 30(2), 225-229.
- Gilliland,G.,&Fleming,S. 1998 A comparison of spousal anticipatory grief and conventional grief. *Death Studies*, 22(6), 541-569.
- 平山正実 1997 死別体験者の悲嘆について——主として文献紹介を中心に 松井豊 (編) 悲嘆の心理 サイエンス社, 85-112.
- Jacobs,S., Kasl,S., Ostfeld,A., Berkman,L.,&Charpentier,P. 1986 The measurement of grief:age and sex variation. *British Journal of Medical Psychology*, 59, 305-310.
- Kelly,B., Raphael,B., Statham,D., Ross,M., Eastwood,H., McLean,S., O'Loughlin, B.,&Brittain,K. 1996 A comparison of the psychosocial aspects of AIDS and cancer-related bereavement. *International Journal of Psychiatry in Medicine*, 26(1), 35-49.
- Lehman,D.R., Wortman,C.B.,&Williams,A.F. 1987 Long-term effects of losing a spouse or child in a motor vehicle crash. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52(1), 218-231.
- Lindemann,E. 1944 Symptomatology and management of acute grief. *American Journal of Psychiatry*, 101, 141-148.
- Lundin,T. 1984a Morbidity following sudden and unexpected bereavement. *British Journal of Psychiatry*, 144, 84-88.
- Lundin,T. 1984b Long-term outcome of bereavement. *British Journal of Psychiatry*, 145, 424-428.
- Lundin,T. 1987 The stress of unexpected bereavement. *Stress Medicine*, 3, 109-114.
- Miles,M.S.,&Demi,A.S. 1992 A comparison of guilt in bereaved parents whose children died by suicide, accident, or chronic disease. *Omega*, 24(3), 203-215.
- Natterson,J.M.,&Kundson,A.G. 1960 Observations concerning fear of death in fatally ill children and their mothers. *Psychosomatic Medicine*, 22, 456-465.
- Parkes,C.M.,&Weiss,R.S. 1983 *Recovery from bereavement*. Basic Books. 池辺明子 (訳) 1987 死別からの回復 図書出版社
- Rando,T.A. 1983 An investigation of grief and adaptation in parents whose children have die from cancer. *Journal of Pediatric Psychology*, 8, 3-22.
- Rando,T.A. 1988 Anticipatory grief:The term is a misnomer but the phenomenon exists. *Journal of Palliative Care*, 4, 70-73.
- Range,L.& Niss,N. 1990 Long-term bereavement from suicide, homicide, accidents,

- and natural deaths. *Death Studies*, 14, 423-433.
- Reed, A.W. 1974 Anticipatory grief work. In Schoenberg, B., Carr, A.C., Peretz, D., & Kutscher, A.H. (Eds.), *Anticipatory grief*. New York: Columbia University Press.
- Reif, L.V., Patton, M.J., & Gold, P.B. 1995 Bereavement, stress, and social support in members of a self-help group. *Journal of Community Psychology*, 23, 292-306.
- Richmond, J.B., & Waisman, H.A. 1955 Psychologic aspects of management of children with malignant disease. *American Journal of Disease Children*, 89, 42-47.
- Sanders, C.M. 1980 A comparison of adult bereavement in the death spouse, child and parent. *Omega*, 10, 303-322.
- Sanders, C.M. 1982 Effects of sudden vs. chronic illness death on bereavement outcome. *Omega*, 13, 227-241.
- Shanfield, S.B., & Swain, B.J. 1984a Death of adult children in traffic accidents. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 172, 533-538.
- Shanfield, S.B., Benjamin, G.A.H., & Swain, B.J. 1984b Parents' reactions to the death of an adult child from cancer. *American Journal of Psychiatry*, 141, 1092-1094.
- Shanfield, S.B., Swain, B.J., & Benjamin, G.A.H. 1987 Parents' responses to the death of adult children from accidents and cancer: A comparison. *Omega*, 17(4), 289-297.
- Siegel, K., & Weinstein, L. 1983 Anticipatory grief reconsidered. *Journal of Psychosocial Oncology*, 1, 61-73.
- Sprang, G., & McNeil, J.S. 1998 Post-homicide reactions: Grief, mourning and post traumatic stress disorder following a drunk driving fatality. *Omega*, 37(1), 41-58.
- Sweeting, H. N., & Gilhooly, M.L.M. 1990 Anticipatory grief: A review. *Social Science & Medicine*, 30(10), 1073-1080.
- Weisman, A.D. 1974 Is mourning necessary? In Schoenberg, B., Carr, A.C., Peretz, D., & Kutscher, A.H. (Eds.), *Anticipatory grief*. New York: Columbia University Press.
- Worden, J.W. 1991 Grief counseling and grief therapy: *A handbook for the mental health practitioner*. (2nd edition). Springer Publishing Company, Inc. 鳴澤實 (監訳) 1993 グリーフカウンセリング—悲しみを癒すためのハンドブック 川島書店
- 財団法人交通遺児育英会 (編) 1981 交通遺児家庭の生活危機と生活不安 同会発行
- 財団法人交通遺児育英会 (編) 1988 交通遺児の生活史調査 同会発行
- 財団法人交通遺児育英会 (編) 1994 交通遺児家庭の生活実態調査 同会発行